

## 蛇鱗の娘

1

森の中は湿った匂いがしていた。午後の陽が木々の梢の合間から金色の光を差し込み、濡れた落ち葉と苔の絨毯の上に細かな斑模様を描いている。歩みを止めて、深緑と朽葉色と土色の足下を見ると、やけに色鮮やかな桃色の太い蚯蚓が私の両足の間を、滑る体を光らせて通り過ぎていった。

私は道に迷っていた。ダーチェンへの入り口である黒の森に入った途端、ウサリカ商人から買った地図は役に立たなくなった。そこにあるはずの道は下草と落ち葉に埋もれて姿を消し、何処までも続く木々と蔓草、四方から聞こえてくる陰鬱な鳥の声、足下から湧いて出るかのような虫の集く音が私の足先と頭の中を幻惑した。

地図によれば、一日の旅程の終わりには小さな村落があり、陽が落ちる前には辿り着ける算段で私は足を進めていたが、森には一向に人の住んでいる気配はなく、大人三人分ほどの廻りのある巨木に付けておいた目印をすでに三回も目にしていった。

巨木の根元のささやかな広がり、今夜は野宿かと思いい腰を下ろし、しばし休息を取っていると、何処からか水の音が聞こえてきた。

散々この周辺を歩き回ったが、川も沼も見当たりはしなかった。

地図によればフンケルの村は川筋にあるということになっている。

私は立ち上がり、水音のする方へ慎重に足を進めた。

緑と黄土色に紅の斑が混じる葉叢をかき分けると、そこには小川が流れていた。川幅は十メートル（約三メートル）ばかり、澄んだ水の底には色鮮やかな緑の藻が流れにそって揺らめき、川面にも小さな水草が浮いてさながら緑の響宴といった趣があった。兩岸には淡

い黄色や白の花々が咲き、金色の陽光は細波に反射して光の花を咲かせていた。

私はその美しい光景に見蕩れて、暫く佇んでいた。やがて、光る川面に何か白いものが浮かんできた。水底から浮かんできたのか、水の作り出す絵模様の中に滲み出してきたのか、或は川下から流れしてきたのか、定かではない。澄んだ水の面に、青白い細長いものが見えてきたのだ。

それは年若い女だった。生きているのか、死んでいるのか、蒼白な顔をした女が、美しい顔と細長い両手を水面から突き出して川の中にいた。長い黒髪が緑の藻と蕩け合うかのように、水の流れに揺らめいていた。

私は不思議なことに然したる驚きの念も抱かず、川の中の女を見つめていた。濡れた白い肌が陶磁のような光沢を放ち、美しかった。半眼に開いた薄い瞼の下で、黒い瞳が硝子玉のように光っていた。

突然その硝子玉のような瞳が動き、私の方を見た。私は驚き後退した。右手は無意識のうちに剣の柄にかかっていた。水の中の女は瞳だけでなく首をこちらに向けた。半ば開いた白く茶けた唇から、水の雫がたたりと零れ落ちた。

私は悪い幻を振り払おうと、目をつぶり頭を二度三度振った。もう一度川の中の女を見ると、それはまたはつきりとしなない白い影のようなものとなり、水の流れに溶け込むように川下へと流れていった。遠ざかるに連れて、白い影は細長い筋のようになり、川面に覆い被さる葉叢の小暗い影の中に消えていった。

地図が正しければ、その先にはフンケルの村があるはずだった。

私は川下へと歩き始めた。いくら歩いても村には辿り着かなかつた。川縁には道がある訳ではないので、藪の薄いとこ、足場のしつかりしたところを選んで歩くうち、いつの間にか水面は見えなくなり、立ち止まり耳を澄ませても水音は聞こえなくなった。

陽が傾いていくだけではなく、空模様も怪しくなり始めた。頭上

には薄紫色を帯びた雲が広がり、冷たい風はたつぷりとした湿り気を孕んでいた。

当て所ない彷徨の旅の途上、野宿などは珍しくもないことではあったが、この天気はこの森の中で一夜を明かすのはあまり楽しいことではない。頼りにならない地図を相応の値段で売りつけたウサリカ商人への憤りが沸き上がったが、今この森の中で彼を呪詛しても詮無いことだった。

もう一度森の奥に入っても雨風の防げるところを探そうかと考えながら、目の前の葉叢をかき分けると、急に視界が開けた。

切り開かれた草地の奥に一軒の館が建っていた。こぢんまりとした切妻屋根の館で、灰白色の板壁には緑色の苔が筋模様を作り、背後から迫る森の緑に抱きかかえられ、溶け合うかのように見える。柿葺きらしき屋根は分厚い苔に覆われ、豪華な緑の織物で覆われているかのようだった。

平屋の切妻造りだが、中央部には小さな露台のある一部屋分ほどの二階があり、そこは寄棟となっている。その下の張り出した屋根付き玄関と二段構えになった様は、古びた神殿や寺院を思わせる雰囲気があった。

不可思議なことに見失ったはずの小川は、館の左手の方に再び現れており、左翼の端の部分を支える柱は、水中から立ち上がっているのだった。そこから、先刻川で見たような白い細長い影のようなものが、柱を伝って館へと上っていくように見えた。だが、自分の目を確かめようとするとその前に、大粒の雨が薄紫と緑がかかった雲からぼつりぼつりと落ちてきた。紫光が走り、雷鳴が轟いた。

私は苔で滑る玄関の階段を上り、緑青の吹いた敲き金を打った。二度三度打ち鳴らしても誰の答えもなかった。廃屋と見て取っても不思議ではない館である。扉を打ち破って中に入るべきか、或は玄関の破風の下で雨宿りをするべきか、少しばかり思案していると、不意に蝶番の軋む音がして扉が開いた。

顔を出したのは齢旧りた女だった。ひどく小柄に見えるのは、腰

が曲がった上に鎌首のように上を向いたひしゃげた逆三角形の頭がついているかららしい。顔色が異様に青黒く、深い皺が網の目のように走っているせいで、まるでその顔は鱗で覆われているかのようになさえ見えた。いささかくたびれてはいるが、豪華な錦織の美しい編み目模様のゆつたりとした襟なし長衣を纏っている。袖口と裾は優雅に広がり、銀鼠色の幅広の帯を締めたその姿は、オストローペ風というよりも、遙か極東のアニヤチ風という印象に近かった。

老婆は深い縦皺が刻まれたほとんど唇のない口を開いて、嘎れ声を発した。

「何者じゃ、何用あってこの館を訪ねる」

黄色みを帯びた大きな眼を見開いたその表情は、どんな答えが返つてこようがここを通すことはないと言っているようだった。

「道に迷った旅の者です。日は暮れ雷雨もやってこようとしています。一宿の情けをかけていただけませんか」

老婆の答えは、極めてわかりやすいものだった。

「ならぬ。この館には何人も入ることは出来ぬ。立ち去れい」

青紫色の閃光が走り、はらわたを震わすような雷鳴が轟いた。ざあつという音が四方を包み、大粒の雨が激しく降り出した。

「では、せめてこの玄関の小屋根の下で雨宿りなどさせてはいただけませんか」

「ならぬ。立ち去れい。この館に余所者が留まることは許さぬ」

短い答えを発した老婆の口から異様に長い糸切り歯が覗いた。前歯はなく、二本の犬歯だけが残っているようだった。

革巾着にダーチェン金貨でも入っていれば交渉材料にすることもできようが、生憎と路用はほとんど尽きかけていた。老婆の意志はこの上なく固く、髪の毛ほどのひび割れも作ることは能わぬことと思えた。

「フジェルダ、そのように無情なことを言うものではありません」

館の中から、そう言う声があった。屈もって遠く聞こえるが、若い女の声のようだった。途端に老婆の眼は下を向き、肩が落ちてその

身が一回り縮んだように見えた。

「御前はこのひどい雨と雷の中に道に迷った旅の御方を彷徨わせようとするのですか、フジェルダ」

フジェルダと呼ばれた老婆の首はますます下を向き、灰白色の艶のない髪だけが目に入った。

「旅の御方を御通ししなさい」

主と思われる若い女の声に、老婆は雨音に紛れてほとんど聞き取れぬ声で「はい」と答え、扉を開けたまま後退った。

少しばかり躊躇してその場に佇んでいると、彼女はもう少し良く聞こえる声で私を館の内へと誘った。

「御姫様は御前を館に入れてよろしいと仰せじや。一生の僥倖と思ひ、有り難く御受けするのじや」

一生の僥倖の雨宿りとは如何なるものかと思いつつ、私は館の内へ足を踏み入れた。

玄関を入った所は広間のようになっていたが、妙に窮屈に感じるのは横幅よりも奥行きの方が長い変わった作りのせいなのだろうか。左右には両翼に通じるらしい扉あり、やや奥まった所には大振りの低い長椅子が三脚と椅子にあわせた低く大きな卓子が置かれている。

家の中は薄暗く、壁際や天井から吊り下げられた年代物の大きな燭台に灯りはなかった。唯一広間の奥の壁に設えられた暖炉の火だけが、部屋の中のをぼんやりと照らし出していた。左右の壁は白っぽい板張りで、何か大きな波のような絵模様が描かれているようだったが、はつきりと見て取ることは出来なかった。

部屋の奥、暖炉の前に立つ人影が言った。

「黒の森でこのような雷雨の中、道に迷うとは、さぞかし難儀なことであつたらう。近う寄つて、暖をとられい」

古めかしい威圧的な物言いではあつたが、鈴を転がすような瑞々しい声だつた。フジェルダが道をあげ、私は声の主の方へ歩を進めた。若い女主は老いた侍女と同様の襟の低い裾の広がった重たげな

長衣を纏っていた。仄暗い灯りの中でも、老女のものよりはるかに手の込んだ色とりどりの錦であることは見て取れた。基調となる色は深い青緑と黒、それに暗い銀と鮮やかな黄と朱が艶やかさを加えていた。

稲光が続けて二度三度走り、小さな白い顔を照らし出した。大きな黒い瞳は電光にも瞬き一つせず、黒曜石のような輝きを放っている。艶やかな笑みを浮かべた唇は濡れた珊瑚色、少し大きめの左の糸切り歯がわずかに先端を覗かせていた。こぢんまりとした鼻と小さな頬はダーチエン人のものとは思えず、時の霧の彼方にこの地に侵攻したという遙か東方のハンゴル族の血を引いているのではないのかという妄想をかき立てる気配があつた。花の顔を縁取る髪は、緩やかに波打ち光を放つ漆黒で、背までの長さがあるようだ。

「日の沈むまでにフンケルの村まで辿り着くつもりでしたが、地図に間違いがあつたようです。真にかたじけない。スナブ・ランケン、放浪の旅の者です」

「地図には間違いがつきものです。自らの目に映り足で踏みしめたものが、常に真実であるとは限りません。道は何処にでも通じており、また何処にも通じていないのです。私はイマサ、この館の主です。今宵はここに休み、明朝フンケルを目指すが良いでしょう」

裂けるような激しい雷鳴が轟いたが、イマサと名乗る女は主然としたすこぶる落ち着いた物腰でそう言った。再び稲妻が光り、白皙の美顔を照らし出したが、その姿は十六七の年若い娘のようにしか見えなかった。長い黒髪は水に濡れたように光って見えた。

通された部屋は天蓋付きの寝台がある大きな部屋だつた。湿気と黴臭さが気にはなつたが、雷雨の中、野宿することを考えれば夢のような境遇だ。

フジェルダが案内してくれたが、老婆は主の言にも関わらず、私を泊めることには承服しかねるといった面持ちだつた。骨張った手に持った燭台から、壁際の燭台に火を移すと、じじつという音がして埃が焦げる臭いがした。

「僥倖に恵まれたことを御前の神に感謝することじゃな。幸運を忘れず、この雷と雨が収まったなら、早々に出立するのじゃ」

「神様には裏切られてばかりでね。あまり信用しないことにしている。出来得れば、明日の朝日が昇るまで雨が降り続いていてほしいものだね」

私の軽口に、彼女は低い骨の高まりに薄い皮が張り付いたような鼻に皺を寄せ、さらに不快そうな表情を作った。

ひんやりとして湿った寝床に横になって雨音と雷鳴を聞いていると、眠気が襲ってきた。重く垂れ下がってくる瞼の裏側に、川の中で見た白い女の姿が浮かんで来た。あれは本当のことだったのだろうか。疲労と不安に惑わされた頭が作り出した幻覚だったような気もした。女は瞼の裏で水の中から出した顔をこちらに向け、誘うように微笑んだ。その顔がイマサという年若い女主の姿と重なった。顔……？川の中の女はどんな顔立ちをしていたのだろうか。思い出そうとしても、ぼんやりとした白い影しか浮かんではこなかった。ほつそりとした青白い指先だけは、妙にくつきりと思いつくことができた。川面から突き出した白い腕と指がするすると伸びて、こちらに向かってくる。十匹の白蛇のような滑る細長いものが絡み付いてくる……。

「夕餉の支度が整いました」

フジェルダの囁れ声が、私を現に引き戻した。老侍女は部屋の入り口に燭台を手に立っていた。顔の網の目のような深い皺を燭台の灯りがくつきりと浮かび上がらせている。人の形には近いが人ではない何かが、そこに立っているような気がした。それは彼女が齢を重ねていることとは違う何かに因つているように思えた。

暗い廊下を食堂へと案内された。外から見たときは、さほど大きな館とは思えなかったが、こうして暗くて細長い廊下を歩いていくと、何処まで歩けば食堂へ着くのだろうかという疑念さえ起きてきた。森の中と同様に、一人ではこの館の内できえ道に迷うのではないかという不安を感じた。幾度か狭い廊下を曲がり食堂へと着いた

が、私はこの館の間取りを思い浮かべることができなかった。

食堂もまた細長い部屋で、緑がかった壁板はそういう色に塗られているのか、それとも黴と苔が館の内にも入り込んで、そういう色合いになっているのか、判別し難かった。暖炉には火が入っていて暖かかったが、湿気を追い出すことはできないようだった。

長細い食卓の奥、螺旋様の細かな彫り物がなされた背の高い椅子に、イマサが座っていた。卓子の上に置かれた燭台の灯りに照らされ、彼女の姿は先刻よりも、余程はつきり見て取ることができた。

半眼に開いた大きな黒い瞳が、じつと動かずに私を見つめていた。黒目がちの瞳は、光の加減なのか、ほとんど白目の部分が見えず、大きな丸い黒曜石の玉が眼窩に嵌め込まれているかのようだった。高い位置にうつすらと描かれた眉の下、丸く膨らんだ瞼には紅桃色の化粧が施され、艶やかな唇の淡い珊瑚色と対をなしている。波打つ黒髪が無肩に重く垂れかかり、なよやかな色香を作り出していたが、何か冷たく固い針のようなものが彼女の身から突き出しているような奇妙な感じも受けた。動かない冷たい黒い目の光が、その奇妙な感覚をもたらしているのだろうか。

色合いの異なつた低い襟が幾重にも重なつた長衣は、蠟燭の炎で金物のような輝きを発していた。

「御待たせいたしました。このような森の奥故、然したる御持て成しもできませんが、どうか御寛ぎになつていただければと存じます。さ、御酒など……」

イマサは扇形に広がつた重たげな長衣の袖口をたぐると、切子細工の酒瓶を手に取つた。象牙色の細い手首には、黒ずんだ赤葡萄酒の入つた硝子瓶は、ひどく重そうに見えた。長衣の細かな網の目と大きめの菱形文様が折り重なつて、彼女が身を動かすと、文様が別の生き物のように流れ動いているかに見えた。

卓子の端と端に座つた私達の間は十イート（約三メートル）ほど離れていた。私が手元の酒瓶と揃いらしい切子細工の酒杯を手に取ると、フジェルダがその杯を取り、女主の元へ運んでいった。イマ

サは優雅な手つきで葡萄酒を私の杯に注ぎ、侍女がそれをまた私の元へ持ってきた。それから自分の杯にも注ぎ、「エータナス、ヴェ・ダース！」と言って酒杯を上げた。ダーチエンの言葉のように聞こえたが、意味はわからなかった。また、侍女が行き来するのかもしれないが、今度は互いの杯を顔のあたりまで持ち上げれば良いらしかつた。

食卓には、小ぶりの兎らしき動物の丸焼き、鳥の卵、生の魚、生々しい紅色の茸などが並んでいた。ひどく空腹だったが、それでも美味というにはほど遠かった。生焼きの肉には、申し訳のように香辛料が振りかけられていたが、それ以外はほとんど味付けというものになかった。

私達は淡々と食事を進めた。二杯目以降の葡萄酒は自分で注いでよいらしく、私の手元にも瓶が置かれたのは有り難かった。酸味の強い重い味だったが、酒であることには間違いなかった。

「旅の身空と御聞きしたが、ランケン殿は何処から参られ、何処へ参るのですか？」

女主の質問に、彷徨の旅の途上で幾度となく語ってきたことを私は答えた。遠く大洋の彼方、メルカーの大都サンジェリイを旅立ち、足の赴くままに世界を放浪しているという話だ。イマサは特に興味を惹かれたという風でもなく、かといって無関心という訳でもなく、幽かな微笑を浮かべたまま聞いていた。

「アニヤチの国にも足を向けられたと……我がヒュンゴルバート家の礎を成した遠い祖先は、東方遙かの地よりやって来たという言い伝えがあります。こうして東の彼方よりの旅人を御迎えするというのも、奇しき御縁というものですな」

そう言つて彼女は顔を綻ばせた。美しい唇をわずかに押し上げている左の糸切り歯の白く滑らかな表が見えた。

途切れ途切れの会話だったが、随分と色々なことを話したような気がした。イマサの黒い瞳は、ほとんど動かさず、ずっと私を見つめているように感じられた。この女は瞬きというものをするのだろうか

か、という奇妙な疑念が浮かんできたが、その時、彼女は薄紅色に塗られた腫れぼったい脛をゆつくりと閉じて、またゆつくりと開いた。

切り細工の瓶に入った葡萄酒は空となり、夕餉は終わった。私はまた老女に導かれ、入り組んだ廊下を通り、寝室に戻った。どれほどの時間がたったのかよくわからなかったが、雷鳴は遠のき静かな雨音だけが聞こえていた。

冷たい寝床に横たわったが、なかなか眠りにつくことはできなかった。葡萄酒の酔いのせいなのか、体が火照り肌の下を虫でも這い回っているかのような嫌な感じがした。

寝台の弧を描いた天蓋には、月光とそれに照らされた雲が描かれていた。色褪せ剥落した夜空の雲模様は、白い蛇か長虫のようなものが身をくねらせているように見えた。薄闇の中にぼんやりと見えているだけなのに、目を閉じてもその白く長いものが脛の裏を蠢いているように感じた。

何かが滑るような音、衣擦れのような音が、幽かに聞こえたような気がした。目を開くと部屋の中に人影があった。

イマサが扉の前に立っていた。燭台の灯りの輪の中で、白い顔と煌めく黒い瞳が見えた。幅の広い腰帯に手をやると、するりとそれは解けて落ち、彼女が寝台の方へ近づくと一足ごとにその身を覆った錦の長衣が脱げ落ちた。白い薄衣一枚となった少女はほっそりとした体をくねらせて寝床に滑り込んできた。

「暖めてください」

そう耳元で囁くイマサの吐息は温かだったが、抱きしめた体はひどく冷たかった。滑らかな肌に触れると、先刻から感じていた不快な酔いがすうつと消えていくようだった。

私は濡れた香りのする少女の折れそうな体に身を埋めた。

目覚めると灰色じみた曙光が部屋の中に差し込んでいた。私は冷たい寝床に一人横たわっていた。身を起こすと節々は不満気に音をたて、体は泥のように重かった。ひどい寝不足のように、頭がぼ

うつとしてうまく物事が考えられなかった。悪い葡萄酒を飲んだせいでだろうか。

肌寒く感じられたがそれも当然だった。私は裸で床に入っていた。昨夜の出来事が臆に思い出されたが、何処までが現で何処までが夢なのか、はつきりとしなかった。私は本当にイマサという女と褥を共にしたのだろうか。幽かに床に残る甘酸っぱい匂いは彼女の残り香なのだろうか。肌に残る心覚えのない幾筋かの薄赤い痕は彼女と欲を尽くした痕跡なのだろうか。

イマサと互いの肉を貪りあつた記憶は確かにあつた。彼女の細く白い体の内には、煮え立つ赤い泥流のようなものが潜んでおり、私は昨夜その流れに身を沈め、一夜の精を注ぎ込んだはずだった。

だが、そうした甘美であるはずの記憶はすべてぼんやりとした霞の向こうにあるようであり、果たして現の出来事であつたのか、信じてよいのかどうかわからなかった。

ただ、寝所の冷たさだけが、確かな現のもののように思えた。

寝台から降りて部屋に散らばっている服を着た。自分の仕草がひどくのろのろとしているのが、他人事のように感じられた。

蝶番が軋んで扉が開き、フジェルダが顔を出した。

「朝餉の仕度が整いました」

老侍女は相変わらず不機嫌そうで、私の逗留を快く思っていないようだった。

私はまた老女に導かれて食堂へと向かった。通廊には窓がないので、昨夜と同様に燭台の灯りが頼りだった。ぼんやりとした頭で道筋を何とか覚えこもうとした。中途にあつた大きな両開きの扉は、確か玄関の広間に通じているはずだった。

食堂にも窓はなく、昨夜と同じように暖炉の火と細長い卓子の上の燭台の橙色の灯りが部屋の中を照らしていた。食卓には誰もいなかった。

「御姫様はまだ御休みになっておられます。遠慮なく御食事をとの御申し付けです」

私は老婆の皺だらけの顔を見ながら、文字通り味気のない朝食をとつた。切子硝子の瓶には昨夜と同じ赤黒い葡萄酒が入っており、侍女は形式的に勧めたが朝から飲む習慣はないと断つた。

「今日こそは陽の沈まぬうちにフンケルに辿り着きたい。道を教えてもらいたい」

私は信頼の置けぬ地図を食卓の上に広げた。フジェルダは無愛想な表情ではあつたが、厄介払いができるとあつてか、骨張り曲がつた指で道順を指し示した。

「この森の中の道は、すでに消え失せて久しい。この目印となつている狷師小屋もすでに朽ち果てているであろう。川沿いのこの細い道を辿つていけば、夕刻にはフンケルの村に着けるじゃろう」

「ありがとう。では、イマサ殿に御挨拶をして、早速出立しよう」

老侍女は大きな黒い目でざろりと私を睨めつけ、皺だらけの口から岩のように固い声を出した。

「御姫様は御休みになっておられる。何人も眠りを妨げることは能わぬ」

「それは残念至極だね」

私は立ち上がり食堂を後にした。自力で寝室に戻りたかつたが、フジェルダはするすると私の前に身を滑り込ませた。仕度を整える間も、半開きにした部屋の戸口に黙って立っていた。

私はグールヴォ峠の山賊から奪つた彎刀を吊り、ヴァールツアの賭場で巻き上げた外套を羽織り、僅かな荷物の入つた布袋を背負つた。

部屋を出ようとしたとき、寝台の敷布の上で、何か光るものが入つた。わずかな路銀でも落としたかと思ひ目をやると、それは硬貨ではなかつた。

金物のような光沢を放つ白いそれは、生き物の鱗のように見えた。指先ほどの大きさのそれを手に取ってみると、雲母片のように薄く半ば透き通つており、細かな銀砂でもまぶしたかのように煌めいていた。やはり、何かの鱗のように思えた。

「出立の御用意はよろしいか。フンケルの村までは、存外時を要するぞ」

老侍女に急かされ、私は部屋を出た。廊下にも玄関の広間にも人氣はなかった。広間は暖炉にも燭台にも灯が入っておらず、小さな窓は窓掛で覆われていた。フジェルダの持つ手燭の灯りだけが、寒々とした部屋に光を投げかけていた。

侍女が門を開け玄関の扉を開いた。灰色の空から差す鈍い陽光がやけに眩しく感じられた。私が礼を言うと、彼女は親切にも再度忠告をしてくれた。

「フンケルは、存外に遠いぞ。振り返らず、疾く足を進めることじゃ」

館の外へ出ると、直ぐさま扉が閉められ、門の降りる音がした。館の前の草地を過ぎて、川沿いにある道とも言えぬような細い筋に足を踏み入れた時、何と言うこともなく館を振り返り見た。

昨日は気付かなかったが、玄関の破風には風雨に摩耗し白つ茶けた彫り物があった。横長の輪を一度捻った形のそれは、交差して自らの尻尾をくわえた蛇のように見えた。玄関の上の望楼様の部分の窓に、白い影が見えた。ゆつくりと動いているように見えるほつそりとした白い影は、水の中で見た幻のようにも、昨夜枕を共にしたかもしれぬ女主のようにも見えた。

## 2

どんなに歩いてても、フンケルの村に近づいているとは思えなかった。川沿いの消え失せそうな道は昼前には痕跡すらなくなり、一度川から離れた私は昨日と同じように森の中に迷い込んだ。忌々しい地図を破り捨てたくなかったが、朽ち葉と倒木の中に埋もれかけている猟師小屋の残骸らしきものを発見したので、思いとどまった。

小屋は板葺きの屋根が抜け落ちて、雨露を凌げる有様ではなかつ

た。腐り果てた残骸の中に、折れた弓矢や錆びた手斧が転がっていた。倒れて床板のようになつていて扉にぼろぼろになつた白い布が貼付けてあるのが目に入った。その上に一匹の蛞蝓が這つていた。親指ほどの大きさのある黒ずんだそれは、ぬめぬめと光る這い跡を残しながら、ゆつくりと動いていた。

布にはその蛞蝓と相似を成す形が描かれていることに、その時私は気付いた。墨は滲み薄れ判然としなかつたが、蛞蝓の形とダーチェン語の飾り文字が描かれた護符か何かであるように見えた。

地図に描かれた猟師小屋の印を頼りに、再び私は歩き出したが、どうしても村に抜ける道に辿り着くことはできなかった。木の間越しに見える空は陽が傾くに連れて雲が多くなり、やがて黒雲に覆われると雨粒が落ちてきた。

外套を身に巻き付け、葉叢の濃い大樹の下へと思ひ足を進めると、急に木立は疎らとなり、開けた所へ出た。

そこには老侍女と女主が住む館が立っていた。

雨がざあつと音をたてて降り始め、真つ暗な空に紫色の稲妻が走つた。一呼吸おいて森中の木々を引き裂いたかのような凄まじい雷鳴が轟きわたつた。

私にはぼんやりとした薄明かりが漏れている目の前の館に向かうしか道はなかつた。

敲き金を打ち、雨音に負けぬように大声で再び一夜の宿を乞うと、意外にも扉は然したる間もなく開き、皺だらけの老婆が姿を現した。

「面目ないが、またしても道に迷つてしまった。雷雨も激しくなるばかりだ。今一度一宿の情けをかけてはくれないだろうか」

フジェルダは縦に深い皺の刻まれた口を妙な形に歪ませた。含み笑いというものをこの老女がすると、こういう顔になるのかもしれないが、判然とはしなかつた。

「それはさぞお困りであろうて。御姫様も御前と別離の挨拶ができなかつたことを、ひどく残念がつておられた。さぞかし、御喜びに

なるじゃろう」

橙色の手燭の灯りと青白い稲光に照らされてそう言うフジェルダの表情は、深い網目のような皺に邪魔されて、どうにも読み取りにくいものがあつた。少なくとも、今朝までの邪険な扱いは異なつていようだったが、本気で私の再訪を歓迎しているとも思えなかつた。

ともあれ老侍女は私を再び館の内に招き入れ、私はまた奇妙に細長い玄関広間の奥で、暖炉の火に当たることができることができた。

「ランケン殿には、きつとまたお会いできるような気がしてしました」

いつ彼女が広間に入ってきたのか、私にはわからなかつた。振り返るとイマサが穏やかな喜びの笑みを浮かべて、そこに立っていた。

「二度までも道に迷うて、さぞ困惑していらつしやいましょうが、これもまた何かの運氣とお思ひになるとよろしいでしょう」

年若の娘とは思えない物言いだつたが、背後に立つ黒髪と黒曜石の瞳の女は、やはり十六七の娘盛りであるように見えた。

イマサは、同様の意匠だが昨日とは若干色合いの異なる重たげな長衣を纏っていたが、私はその中に、胸の薄い華奢な裸身を思い描くことができた。そう、私は昨夜この館で、確かに彼女と褥を共にし、歓を尽くしたので。あれが幻や夢であるはずはない。

私達は、また雷鳴と雨音を聞きながら食事をした。昨夜と同様の簡素な料理だったが、何故だか昨日よりは美味しく感じられた。女主人は昨夜と同じ「エータナス、ヴェ・ダース！」という乾杯の言葉を口にした後、もう少しわかりやすい言い回しで「ランケン殿との再会を祝して」と付け加えた。

切子細工の酒杯の中の葡萄酒は、赤黒くどろりとした古い血のようにも見えた。だが、その腐つた果実を思わせる匂いはひどく私を誘い、一息で杯を干してしまつた。

「ランケン殿は随分と喉が渴いていると見えます。フジェルダ、お

注ぎなさい」

婉麗な微笑みを見せながら、イマサは自分の杯の酒を嘗めるように口にした。白い糸切り歯と、酒の色がついたのだろうか、やけに赤く細長い舌先が覗いた。珊瑚色の脛の下の黒い瞳は、私を見据えて動かなかつた。

注がれた酒を私は呷つた。昨夜のあまり心地よいとは言ひ兼ねる酔いの記憶は、随分と遠ざかつてしまつたようだつた。イマサとどんな話をしたのか覚えていない。気がつくると酒瓶は空となり、私はまたフジェルダに導かれて寝所へと向かつていた。

廊下は奇怪な曲線を描いて複雑に折れ曲がり、左右に異常に傾いているように思える箇所すらあつた。前に行く老婆の持つ燭光が風もないのに揺らめき瞬き、影絵となつた姿が歪に伸び縮みして酩酊をさらに深めた。

酔つて熱を持った体には、湿つて冷たい寝床が心地よく感じられた。私は頭の中で何かがぐるぐると渦巻いている感じを味わいながら、眠りに落ちた。

夢の中でも酩酊感は消えなかつた。何かが、或は私の意識すべてが、頭の中でぐるぐると不規則な回転を続け、全身が蕩けてその渦の中に巻き込まれていくような感じがした。

ゆつくりと、ぐるぐると回る渦は、油泥のように虹色に輝き、煌めく無数の鱗を持つ蛇が蜷局を巻き這うねっているかのようだつた。蛇は私の体に巻き付き、ゆるゆると動き回る。冷たく滑らかな肌合いが奇妙な心地よさを感じさせた。

間近に蛇の頭が迫り、ちろちろと動く細い赤い舌と陶器のように滑らかな白い牙が見えた。脛のない黒い瞳がじつと私の目を見据える。鱗に覆われた三角形の頭が急に二つに裂け、薄皮のようになつて剥がれ落ちた。蛇の頭の中から現れたのは、イマサの白晳の顔だつた。

はつとして目を開いた。不快な冷たい汗をかいていた。燭台の灯が燃え尽きた部屋は青白い薄明かりで照らされている。窓辺に寄つ



て外を見ると、雨は既にやんでおり、冷たく冴えた月光が鱗のような雲を照らし出していた。

振り向くと、部屋の扉の前に三角形の人影が佇んでいた。敷き詰められた絨毯が人形をとってそこに立ち上がったかのように、長衣の裾を扇のように広げたイマサの姿があった。

「戻ってきてくださったのですね、ランケン殿」

女主はそう言っただけで音もなく私の方へ一歩進み出た。

「あれは夢ではなかったのか」

独り言のように答えると、イマサはつつうと私の一歩前まで小走りに寄った。綺羅衣の裾が割れて折れそうに細い白い足首が覗いた。丁度窓からの月明かりが彼女の足下にあたり、小さな素足を艶かしく照らし出した。左足の踝の少し上のあたりに薄青い痣が幾つか並んで見えた。

「どうして、あれが夢幻でありましょうか。ランケン殿はこの森の館で身も心も朽ちんとしていた私に、生命の息吹をもたらしてくれたのです。旅の御方故、引き止めることも能わぬと思い、朝は一人悲嘆に泣き伏せておりました。それが、偶然とは言えこのように再び相見えることができるのは、イマサは嬉しゅうございます」

少女は黒曜石の瞳でじつと私の顔を見据え、早口で再会の喜びを語った。私が何と答えようか、一瞬戸惑っているうちに、彼女は最後の一歩を進めて、私の胸の中に飛び込んできた。既に腰帯を解いていたのか、幾重にも重なった衣がするすると落ちて、華奢な白い肩が露になった。香しい女の匂いがした。

「僕は放浪の旅の者だ。明日の朝には……」

イマサの細く冷たい指が私の唇に押し当てられ、言葉を遮った。

「そのようなことは、端から承知の上です。只、あなたはこの一夜、私の冷えきった体と心を温めてくだされば良いのです」

蟬細工のような白い指先が唇から喉元へ滑り落ち、私の胸元を撫で回した。冷たく、しかし滑らかで柔らかいその感触に抗うことは難しかった。私はまだ年輪も行かぬこの少女に気圧されて（籠絡さ

れてと言うべきだろうか）白く冷たい肩を抱き締めた。

「ああ、ランケン殿、嬉しゅうございます」

イマサの甘い吐息が耳孔の奥深くまで吹き込まれ、頭蓋の中まで染み込んでくるようだった。

最早、体の深奥から沸き起こる血の滾りに逆らうことはできなかった。私はイマサを抱き上げ、寝床へと運んだ。一足進むごとに衣が一枚ずつ滑り落ち、生まれたままの姿になった少女を私は寝台にそつと下ろした。

錦織の長衣を纏っているときは豪奢な衣裳の上に小さな花の顔が載っていると聞いた風情であったものが、今こうして一糸も纏わぬ姿を見ると、むしろ体つきがあまりにほっそりとしているせいで、十三四の娘のようにさえ見える。波のように広がる黒髪の上の蒼白い裸体は痛々しさすら感じさせ、ある種の嗜虐心を掻き立てるような趣があった。

「寒い、ひどく寒い、暖めてください……」

彼女はそう言っているのだろうか。珊瑚色の唇の濡れた唇がぬらぬらと蠢き、白い糸切り歯が見え隠れしていた。異様に赤い舌先が出たり入ったりしている。白い細い手足を艶かしく蠢かして私を床へと誘い込もうとする姿は、凄艶そのものだった。

私は彼女のなやかな腕に抱かれるかのように、身を重ねた。冷たい肌は吸い付くように滑らかだった。月光を浴びて濡れた唇が煌めき、透き通った唾液が長い糸切り歯を伝って滴るのが見えた。唇を重ね、舌を絡ませ、その甘露を味わった。

肉の薄い陰裂の中へ一物を突き入れると、中では熱い肉の流動物が蠢いていた。細い足が私の腰に絡みつき、細腕は胸を抱きすくめ、指先は背中を這い回った。長い舌が口中奥深く入り込みねつとりと動き回り、私の舌も歯も頬の肉さえ絡みとられていくかのような気がした。

私の動きに応じて細い喘ぎ声を漏らしながら、少女は華奢な体をくねらせ、いよいよその身を強く私の体に絡ませた。肉壺の中の蠢

くものは、無数の長虫が絡み付くかのように一物を愛撫し、締め付け、また撫で回した。

情交を終えると、汗ばんだ私の胸に頭を乗せたイマサは、悦楽の名残を惜しむようにちろちろと動く細い舌先を私の乳首に這わせた。むず痒いような心地よさを感じながら、彼女の波打つ乱れ髪と滑らかな肩を撫でた。肌には一雫の汗もなく、温もりが失せていくのを感じた。

「寒いわ……」

私は上掛けを引っぱり、二人の体を包み込んだ。急に眠気が襲ってきたが、イマサの舌はずっと私の胸を這い回っているようだった。

眠りに落ちてもずっとそのむず痒いような快感が続いているようだった。夢の中でも私はイマサと交わり続けた。絡み付く少女の白い裸身はいつしか明瞭な形を失い、ゆるゆると蠢き身を締め付ける蛇のような巨大な長虫のような得体の知れないものとなり、私の体はその奇怪極まりない官能の生き物と一つに溶け合い、果てしない快楽不退の有様となった。彼女の長い赤い舌は口中から喉奥深くまで侵入し、体の内側から私を愛撫し続けた。

その黒蓮の夢のような喜悦の中で、時折僅かに煌めく冷たい二つの輝きが、私の蕩けていく心を刺すように突き刺し、幽かな正気をもたらししていた。

それはイマサの目だった。黒い硝子玉のような透き通る硬質な輝きが、ずっと私を見つめていた。正体の知れぬ快楽の妖物と化しても、その目だけはじつと私を見据えているのだった。

背筋が凍り付くような恐怖を感じて、私は目覚めた。目を開いても、黒い双眸は消えはしなかった。イマサが私の上に覆い被さり、淫らな動きで体をくねらせていた。半眼に開いた瞼の下で瞬きをしないうが、心の深奥まで届く恐ろしい淫靡な魅了と呪縛の光条を放っていた。

身を起こそうとした刹那に、柔らかな膨らみを持った瞼がゆつく

りと閉じられ、また開かれた。私は彼女の目から視線を外すことができなかった。イマサは私の胸を撫で摩りながら細腰を浮かして下ろし、私の一物を巧みに肉孔に納めた。

最早私には抗う術はなく、粘り着くような彼女の動きに合わせて押し寄せ渦巻く快楽の波が、心中の理性と恐怖の砦を打ち砕いた。夢の続きは現となり、また夢となり、私はその心地良い泥沼の中へ身を沈めていった。

もう一度目覚めると、部屋はまだ薄青い闇に包まれていた。窓から差し込む光は沈もうとする月明かりなのだろうか、それとも曙光の幽かな訪れなのだろうか。目覚めの一瞬に感じた強い不安と恐怖は、イマサが一つ褥の内にいることだったのだろうか、それともいないことだったのだろうか。いずれにせよ、彼女は私の目の前にいた。大きな黒い目は半ば閉じられ半ば開かれていたが、黒い瞳には薄い膜でもかかっているかのようにであり、起きているのか、眠っているのか、よくわからなかった。

私が彼女の柔らかな頬に触れようとして僅かに手を動かすと、その黒い瞳に光が宿り、珊瑚色の唇が艶笑を形作った。

「起きていたのですね」

辛うじて聞き取れる囁き声がそう言った。私はただ頷くことしかできなかった。イマサは愛らしい小さな鼻の頭を私の鼻に押し付け、くすくすと囁れた笑い声を上げた。彼女の鼻先は冷たかった。それから、滑る赤い舌が私の唇を嘗め回し、体の奥深くへ入ってきた。一物が痛いほどに固くなっていた。私にはそれを少女の股間に突き入れることしか考えられなくなった。私達はまた身を重ね、貪るように求め合ったが、私のすべての行為は彼女の細く切れ切れの喘ぎ声の中に霞のようになって消えていくような気がした。

幾度目なのか、目を覚ました時、私は寢床に一人だった。ひどく乱れた敷布と上掛けに染み付いた甘酸っぱい匂いは、昨夜の交情の激しさの痕跡のはずだったが、何故かその記憶は紗幕を幾重にも掛けたかのように薄ぼんやりとしたものと思われた。

窓から差し込む黄灰色の朝日が、そのぼんやりとした記憶をさらに掻き消していくような気がした。

私は寝台とその周りに散らばっている衣服を拾い集めて身につけた。乱れた寝台の上には、朝日を浴びてきらきらと光る鱗が何枚も落ちていた。

日差しに半ば透き通る美しいその小片を眺めていると、噎れた声で聞こえた。

「朝餉の支度が整いました」

フジェルダの皺だらけの顔が扉から覗いていた。

「イマサ殿の御機嫌は如何なものだろうか」

「御姫様は、御休みになっておられます」

昨日と同じ会話を私達は交わした。そしてまた私は老婆に導かれ、食堂へと向かった。起きたばかりだというのに、膝までの泥の中を這い回っているように足が重かった。朝食の最中にも、うっかり目を閉じるとそのまま眠りに落ちてしまいそうな気分だった。

「ひどくお疲れのようじゃな。酒でも少しばかり召し上がれ。身に力が沸き起こりますぞ」

フジェルダの親切ごかしの勧めには、某かの隠された意図があると考えるべきだったのだろうが、その朝の私はただその勧めに頷いていた。酒杯に注がれた赤黒い葡萄酒を私は味わうでもなく何とはなしに飲み干してしまった。

食事が終わると、私はまた昨日の朝と同じように老侍女にフンケルの村への道筋を尋ねた。昨日、猟師小屋の残骸を見つけたことを話すと、そこからの道を教えられた。老婆の声が遠い所から届もつて聞こえてくるような気がしたが、何故だかとても良くわかったような気がした。

部屋へ戻ってのろのろと出立の支度をした。一つ一つの動作が億劫で仕方がなかった。寝台の乱れた敷布がイマサの白い裸身となつて、妖しく身悶えしながら私を誘っているように見えた。

「お疲れが抜けぬようじゃな。今暫くお休みなつてはどうじゃ」

部屋の戸口から顔を出したフジェルダが薄笑いとも見える表情を作つて、皮肉な台詞を口にした。私はそのまま頷いて、寝床に身を横たえたい気持ちに駆られた。

「今日こそはフンケルの村に着きたいからね。ここでずっと蜷局を巻いているわけにはいかないさ」

空元気でそう答えると、フジェルダは言葉の代わりに、網目のような皺のよつた顔に、含み笑いとも哀れみともとれる奇妙な表情を浮かべた。

私は昨日の朝と同じように怪老婆に見送られて館を後にした。振り返ると苔むした柿葺きの屋根から、朝露か昨夜の雨の名残りか、水の雫が滴っているのが、朝日に光って見えた。望楼の窓に人影は見えなかった。私は曖昧な失望感のようなものを感じながら、歩みを進めた。

### 3

目印となるはずの猟師小屋の廃墟に辿り着くまでに、半日以上を費やした。イマサの館から然したる距離はないはずだったし、道筋もわかっているつもりだった。けれども、ひどく遠い道程になってしまった。

倒木に座り込み、暫くぼうつと廃屋を眺めていた。老婆の教えてくれた道を辿れば、今度こそ村に辿り着くことができるのだろうか。或はまた緑の迷路に屈して、蠱惑の娘の館へ舞い戻ってしまうのだろうか。漠たる不安は感じたが、疲労のせいなのだろうか心の動きは鈍く、気持ちはずっと曖昧なままだった。

ぼんやりと朽ちた柱や屋根壁を見ていると、その合間に何か球形の物が見えてきた。薄汚れた象牙色をして、ひび割れが入っている。大きな穴も開いている。それが人間の髑髏であるとわかるまで、随分と時間がかかったような気がした。

私は重い体を引きずるようにして立ち上がり、側へ行って仔細に見た。

頭骨と足か腕の骨、肋の一部が、倒れた柱や頽れた壁板に埋もれるように見えていた。この小屋を使っていた猟師のものなのだろうが、射止めようとしていた獣に逆襲されたのだろうか、或は森の奥で病に倒れて動けなくなったのだろうか。理由は何にせよ、彼はもの言わぬ骨となり、廃屋や倒木、朽ち葉と区別のつきかねるものとなっていた。

疲労と空腹に鈍った頭に、重苦しい恐怖が沸き起こってきた。沼底に沈んでいた汚泥をその骨によって掻き起こされたかのようにだった。

もう一度地図を見て、老侍女の話を思い起こした。猟師小屋からフンケルの村まで、急げば日暮れまでに着けるはずだった。だが、またしても小暗い緑の迷路は私を惑わし、見えてははずの細い道は落ち葉と下生えの中に途切れ途切れになり薄れていった。

冷たい汗をかきながら恐慌に襲われそうな気持ちで必死で押さえて歩いたが、辺りは次第に暗くなるばかりで、道らしきものはほとんど見いだすことができなくなった。

梢の合間に見える空は黒い雨雲に覆われ、雨粒が落ちてきた。雷鳴こそ今日は聞こえなかったが、俄に風が起こり、ざわざわと枝葉を揺らして恐ろしい音をたてた。

唐突に森が途切れ、黄色い灯りの洩れるイマサの館を目にしたときには、驚きや怖れ、不安は心の底に沈み込み、むしろ安堵と喜びが沸き起こってきた。

私は吸い寄せられるように玄関の小屋根の下の階段を上った。扉を叩こうとするとすうっとそれは開き、仄暗い館の中に私は吸い込まれるように入ってしまった。

奥の深い広間は燭台に灯が入っておらず、奥の暖炉からの火明かりだけで照らされていた。背もたれの高い椅子や調度の影が長くこちらに伸びていた。その影の一つがゆっくりと動き、形を変えた。

私はその影に向かって広間の奥へと歩いて行った。影の主、館の女主人は、暖炉の前にほっそりとした影絵となつて佇んでいた。

イマサの元へ歩み寄るうちに、私の身からは布袋や外套や剣が剥がれるように落ちていった。

私は無言で彼女を抱きしめ、甘い香りのする黒髪を撫でさすつた。

「また、きつと逢えると信じておりましたわ」  
少女は私の胸の中で、囁くようにそう言った。

私は一層強く彼女をかき抱いた。豪華な錦に包まれた細い体は飴細工のように私の腕の中で蕩けた。私達はそのままそこで身を重ねた。

心底疲れていたにもかかわらず、私は恐ろしい欲望に駆られて、少女の柔らかな肉に激しく一物を突き入れ、狂ったように全身を動かした。何処までも彼女の体の奥深くへ入り込み、溶け合いたいという強烈な欲求に支配されていた。彼女の細い手足もまた私の欲望に依って、我が身に強く絡み付き、私達は欲情に突き動かされる一つの生き物のようになり、暖炉の火明かりの中で互いを貪り尽くした。

互いの絶頂が重なり合い、獣じみた声を出して溶け合う体を痙攣させると、私の意識は深い暗い沼の底へと沈み込んでいった。その闇は、不安や不快ではなく、むしろ安寧と充足をもたらす心地良い闇だった。

私は柔らかな泥に覆われた沼底に横たわり、幽かに光が見える水面を眺めていた。光は小さな人影のようにも見え、ちらちらと輝きながら奇妙な踊りを踊っているかのようにも見えた。私は安らいだ気持ちで、その滑稽な踊りを眺めていた。無数の小人が踊り続ける可笑しくもあり醜怪でもある踊り。

濁った水を通して、小人達の引き攣つたような笑い声が聞こえてくるような気がした。意味有り気だが、実のところは何の意味もない、空疎な言葉の骸が連なっているかのような笑い声だ。

私は沼の底に身を横たえたまま、虚ろな笑いを聞きながら奇妙な踊りを眺め続けた。

「食事の仕度が整いました」

どれ程の時間がたったのだろうか、嘎れてはいるが、明瞭な声が水面から耳元へ響いてきた。老侍女の最早耳慣れたと言つていい声が、私を闇の沼底から水面へと引き揚げた。

臉を開くと、消えなんとしてゐる弱々しい暖炉の火に照らされた、フジェルダの皺だらけの顔が見えた。老女の齢旧りた顔に浮かんでいる表情は、網の目のような深い皺の中に埋もれてはつきりとはしなかつたが、これまでにない笑いを浮かべているようにも思えた。

イマサが掛けてくれたのだろうか、薄い毛布を払いのけて身を起すと、きらきらと光る小片が落ちた。暖炉の赤い火を受けても白虹色に光るそれは、やはり何かの鱗のように見えた。

私は老侍女の後を這うようにして歩き、食堂へと辿り着いた。暗い廊下は這い這う蛇か蚯蚓のように曲がりくねり、進む程に幅は狭まり天井は低くなり、まるで四角い窖のようにさえ思えた。

食堂ではイマサが待つていた。錦織の長衣ではなく、銀白に輝く白装束を纏つていた。艶のある白地の上には渦巻き波打ち絡まり合う絵模様光る銀糸で織り込まれ、錦織の文様と同様に、彼女が少しでも身を動かすとそれは生き物のようにうねり蠢き、淫靡な光を発した。

食卓の銀の器には、奇怪な食事が用意されていた。生皮を剥がれて赤い肉を剥ぎ出しにされている生き物は、兎なのだろうか、鼠なのだろうか。大皿の上に溜まつている赤い液体は味付けの煮汁なのだろうか、それとも生き物の血なのだろうか。小皿の上に盛られている黒ずんだ茶色のものは、蝗か何かの煮干しのように見えるが、節くれだつた細い足が蠢いているように見えるのはひどい疲れのせいなのだろうか。

別の大皿には無数の卵が載っている。鶏卵らしきもの、もう少し

小振りなもの、脚付きの銀器の上に殻付きの卵が金字塔のように詰まれ、その下には殻を割られた生卵が白と黄色の入り交じつた小さな池を成している。

そして一際豪華な打ち出し飾りがなされた銀皿に盛られている緑と茶の斑の生き物、身動きできぬように銀の串で腿から腹まで貫かれてゐるが、未だ死には至らずひくひくと瘰癧を繰り返している生き物。生きた蛙がこの晚餐の主役なのだった。

この醜怪極まる食卓の向こう側に座るイマサは、輝くばかりの美しさだった。波打つ黒髪と艶やかな珊瑚色の唇が白装束に映え、臉を彩る紅は控えめでも、頬から連なる薄桃色が清艶な美貌を彩つていた。

「エータナス、ヴェ・ダース！」

三度目となる乾杯の言葉を彼女が発した。私は赤黒い葡萄酒の注がれた切子細工の酒杯を掲げ、その言葉を唱和した。その場にいるのは、女主と私、フジェルダの三人だけだったが、その言葉はまるで百人もの宴席の人々が一齐に唱和しているかのような響きを持ち、細長い奇妙な食堂の中を駆け巡つた。イマサの黒曜石の瞳がじつと私を見据え、私はその目に縛り付けられたまま、杯を干した。

「三度の奇しき迷い道と運氣が旅の御方をこの館に導かれた。奇しき定めが永久の契りを連れてこられた。弥栄、弥栄」

フジェルダが儀式張つた祭司のような口調で、そう言つた。そう、これは儀式、婚礼の儀式なのだろうか。「待つてくれ」と言おうとしたが、唇も舌も喉も金縛りあつたように動かなかつた。視線はただイマサの黒い双眸に吸い寄せられ、瞬きすることもできない。

時折、意味の取れない古い言葉（それはダーチェン語とは思われない東方風の響きを持つていた）を交えて、老女の祝詞は続いた。再び汚血のような酒で私達は乾杯した。

それから食事が始まつた。女主は（今や、文字通りの私の女主に

彼女はなつたのであろうか。優美な手つきで銀の肉叉や匙、箸を使って、奇怪な料理を口に運んだ。珊瑚色の可愛らしい唇が開き、長い糸切り歯を覗かせながら、纏れ合う虫のようなもの、赤い汁の滴る生肉、黄色と白の透き通る卵を飲み込んでいった。

私の手と口は、彼女の動きにぴったり合わせるように動き、食事を進めた。頭の中の何処かでは恐ろしい嫌悪感が膨らんでいたが、私の舌はこの怪異な料理を美味と感じ、腹の中に送り込んだ。

やがてイマサは、未だ手足をひくつかせている蛙を小さな白い手に取った。白いぬめぬめと光るその腹は、彼女の掌よりも大きく見えた。

少女は両手で蛙をつかむと口元へ持っていった。唇から赤く細い舌先が覗き、身悶えする蛙の頭を味見するように嘗めた。それから蛙の方へ落としていた視線を上げ、また私の目を覗き込み、悪戯っぽい嬉しげな笑みを浮かべた。

イマサの美しい唇は信じがたい程大きく開き、蛙を半分程飲み込んだ。まるで絡線人形の顎が外れたかのようだったが、白い滑らかな頬もふつくらした唇も裂けても切れてもいかなかった。ただ、彼女の拳よりも大きな生き物を飲み込める程大きく開いているのだ。

長い犬歯が蛙の白い腹に突き刺さり、赤い血玉が膨らんだ。私の視線を捕らえていた黒い大きな目が、一瞬流れ落ちる獲物の血を追って、ぎろりと動いた。赤い雫が下唇に吸い込まれると、妖力を持つ視線はまた私を貫き、凄絶な笑みを浮かべた。

イマサは口と顎、それに白い喉を前後に蠢かし、蛙の残り半分を飲み込みにかかった。腿がひくひくと大きく痙攣し、水掻きのある足が最後の足掻きを見せたが、少しずつ、ずるずると女の口の中に飲み込まれていった。

唇に吸い付いていた最後の吸盤が口の中に収まると、イマサは大きく喉を動かし、蛙を胃の腑の中に送り込んだ。白く細い喉頭が異様に大きく膨らみ、獲物を腹の中に落とし込んだ。異様極まりない醜怪な姿だったが、ひどく生々しい色情に満ちた姿にも見えた。私

は一物が固くなるのを感じた。

私の花嫁は満足げな微笑みを浮かべ、美しい唇の端についた蛙の血を白い指で拭くと、何事か囁いた。声は彼女と私の間にある淀んだ気に吸い込まれるようにはつきりとは聞こえてこなかったが、黒く透き通る腫が必要なことを語っていた。

私は自分の前の皿に載せられたまだ半分は生きているものを手に取った。太腿から腹へ突き刺さった串を抜くと、私の獲物は白い腹と腿を淫らがましく蠢かした。冷たく湿った肌が、手に心地良い。

口をできるだけ大きく開き、その生き物をそこへ持っていった。緑と茶色の斑の皮膚を持つぬめぬめとした生き物。

口に入れる寸前に、私の視線はイマサを離れ、目の前の蛙に注がれた。まだ生きて動いている黒い丸い腫が私を見たような気がした。

急に激しい吐き気に襲われ、私は蛙を卓子の上に投げ捨てた。蛙は思うように動かぬ手足をばたつかせて、必死で何処かに逃れようと足掻いた。

「嫌だ、嫌だ、助けてくれ！」

誰かの叫び声が聞こえたが、どうやらそれは私自身のものようだった。

蛙の足掻きは節くれだった皺だらけの手によって止められた。フジェルダはその生き物を鷲掴みにすると、するすると滑るようになたしの側に寄った。

「ランケン殿、御姫様は殊の外この馳走を好んでおられます。御姫様の花婿となるためには、貴男様もこの馳走を召し上がらねばなりませんね」

フジェルダは右手で痙攣を繰り返す蛙をつかみ、左手で私の下顎をつかんだ。恐ろしい力で私の口は大きく開かれていく。抗おうにも私の全身はイマサの黒い腫に拘束されて、動くことができない。

めりめりという嫌な音は顎の骨が外れる音なのだろうか、ぷつぷつという小さな音は唇や頬が裂けていく音なのだろうか。

冷たくぬるぬるとした固まりが、口の中に押し込まれた。猛烈な吐き気が込み上げてきたが、お構いなしに蛙が口の中に突っ込まれる。

見えない縄を引き千切ろうと、私は暴れた。だが蛙は恐ろしい力で口の中に押し込まれてくる。

「御姫様は永久に御前と一つになりたいのじゃ、永久に一つに……」

老婆の声が頭の中に幾千に飮して響き渡った。目の前を蛙の緑と茶色の肌、フジェルダの鱗持ちのような皺だらけの肌、イマサの滑るように光る白い肌が交錯して渦巻き、輝き蠢く流動物と化した。

気が遠くなる寸前に感じたのは、冷たくぬめぬめとしたものが、喉奥深く押し付けられている感触だった。ひどい吐き気がした。胃の中のものだけでなく、はらわたそのものさえ吐き出してしまいうな、ひどい吐き気だった。それでも蛙は私の喉に押し入れられようとする。酸っぱいものが込み上げてきて舌を刺激する。こんなものは食べたくない。だが、黒曜石の瞳が私に命じる。この両棲の滑る生き物を飲み込み、我が花婿になれと……。

胃の腑の中から蛙の鳴き声が聞こえたような気がして目が覚めた。冷や汗がどつと吹き出る。恐怖に襲われて裸の腹を押さえたが、中で何かが蠢いている様子はなく、溶けかかった蛙の苦悶の声も聞こえてはこなかった。

私はまたあの古びた天蓋付きの寝台に横たわっていた。黴臭く湿った寝具が裸の私を取り巻いていた。

「どうなされました。悪い汗をかいておられます。厭わしき夢でもご覧になりましたか」

間近にイマサの顔があった。化粧を落とした頃の小さな白い顔は、ひどく幼く見える。

「ああ、嫌な夢を見たようだ。蛙を、生きた蛙を丸呑みする夢だ」

「まあ、恐ろしい、そんな野蛮な。蛙の腿の串焼きは、珍味だときれることもあります。丸呑みではまるで蛇ではありませんか」

「ああ、ああ、そうだな」

私は震える手でイマサの薄い肩を抱きしめた。上掛けと同じように冷たく湿った肌だったが、幽かな温もりがあるように感じられた。とても貴重な温もりだ。

私はその温もりにすがりつくように彼女を抱いた。疲れを知らないかのようにイマサは激しく身を絡め、私の体の熱を搾り取って行った。自分の体が冷えてくると、暖まった彼女の華奢な体がいつそう欲しくなり、私達は繰り返して体を重ね続けるのだった。

#### 4

あまりに疲労困憊していたせいなのか、或は何処かの気紛れな神の悪戯心なのか、私の眠りは浅く、一つ寝の相手の動く気配に目が覚めた。夜明けの灰色じみた薄明かりの中、寝台を滑るように降りた白い長い影が扉の方へ動いて行くのが、ぼんやりと見えた。その白い長衣を纏った影は、立って歩いているのではなく、ずるずると床を這っていくように見えた。

白装束の背には長い黒髪が流れていた。絨毯の上を動く細腕も見えた。だが、衣の裾は不自然に長く床の上に伸び、くねるように動く何かを覆っていた。

白い影は扉の向こうに消えた。私は裸の半身を起こし、奇怪な姿に変貌した恋人が出て行った戸口をぼんやりと見つめた。

冷えた体の奥から、さらに冷たいどろりとした固まりが込み上げてくるような気がした。あれは何だったのだろうか。

私は服を着て靴を履き剣を身につけた。敷布の上にはきらきらと虹色に光る鱗が何枚も落ちていた。

胃の腑のあたりの冷たい固まりが胸を焼き、喉をちくちくと刺した。ひどく不快な心持ちで私は寝室を出た。

廊下は曲がりくねることなく、ただ単純に伸びている暗い小道

だった。食堂の裏手と思われるあたりに、さらに奥の方へと続く廊下と階段があった。階段は望楼のような二階部分に通じているのだろう。一昨日の朝（確かに一昨日のことだったのだろうか、もつと多くの日数が過ぎていような気もした）目にした望楼の窓に動く影が頭の中をよぎった。

私は軋む階段を上った。欄干には絡み付く蛇の彫り物がなされていた。階段の中央には何かを引きずったかのような跡が幾つもついていた。小さな踊り場には黒っぽい床板の上に、さらに黒ずんだ大きな染みのようなものがあつた。

階段を上りきるとそこは十イート（約三メートル）四方形の小さな部屋だった。天井から吊るされた飾り燭台に明かりはなかつたが、玄関破風の上に位置する曇った硝子窓から鈍い朝の光が差し込んでいる。

部屋は只の望楼ではなかつた。無数の人骨が置かれていた。一体、何人分の骨があるのだろうか。元々は三方の壁際に胡座を組んで並べられていたようだが、壁が足りなくなるとその前にも置かれ、さらにその前にも置かれ、ほぼ三重の方形を描くように骨と化した骸が置かれていた。壁際の骨は相当に古いもののように、朽ちて頽れたものも多かつた。部屋の中央に行くに連れてただ投げ出されるように置かれているものもあり、粗野な墓盗人に荒らされた納骨堂のようだった。

部屋の中央に立つと、無数の髑髏の黒い虚ろな視線が私に注がれているような気がした。剥き出しになった歯も顎も動きはしなかつたが、軋み擦れる声が聞こえるような気がした。疾く此処を去れ、と言っているのだろうか、それとも此処に参列せよ、と言っているのだろうか、軋む声は錯綜し明瞭に聞き取ることではできなかった。

正面の壁の真ん中には、他の骨とは様相を異にする骸が座っていた。骸は白骨ではなく木乃伊だった。どの死骸よりも古びているようだったが、褐色に乾涸びた薄い肉と皮が辛うじて骨の上に張り付いていた。ぼろぼろに朽ちてはいるが豪華な錦織の衣を纏っている。

。組んだ足の前には、磨かれた黄金の香炉と燭台が置かれ、香炉からは幽かな煙と香りが流れ、燭台の蝋燭からは小さな炎が上がっていた。

木乃伊は何も語ってはいなかつた。髑髏のように歯と骨で何かを訴えようとはしていなかつた。ただ、そこに静かに座っているだけだった。

私は階段を駆け下りた。恐怖で混乱した頭には、足音を忍ばせることなどは、考えられなかつた。

階段の下にはフジエルダが待ち構えていた。

「ランケン殿、見ましたな！」

凄まじい形相で怪婆は叫んだ。

「あれは、あれは何だ！あの屍骸の山は！」

老侍女は唇のない口を大きく開けて声のない笑いをあげた。

「御姫様の花婿たちじゃ。御前も二階の骸たちと同様の愚か者じゃな。儂は一度は忠告をしたのじゃぞ。だが、御前は戻ってきてしまった。もう手遅れじゃ。御姫様はいたく御前がお気に召しておられるよつて、暫くは二階には行かずにすむかもれぬがな」

フジエルダの開いた口からは真つ赤な二股に分かれた舌が飛び出し、私を嘲笑うかのように蠢いた。

私はものも言わずに彎刀を抜いて斬りつけた。短いぎゃつという叫び声を上げて、奇怪な老婆は倒れた。冷たい血飛沫が降り掛かる。

血溜まりの中で蠢く老婆の体は、異様にねじくれ変形し、異形のものへと姿を変えようとしている。

私は一刻も早く館から逃げ出したかった。食堂の脇の短い廊下を抜ければ玄関広間のはずだ。

「ランケン殿！」

その声は何処から聞こえてきたのか、私にはよくわからなかつた。背後からのようでもあり、頭上からのようでもあり、心の内に直に響き渡ってきたようでもあつた。いずれにしても、その声は私



の足を一瞬にして止めた。

「ランケン殿、ランケン殿、何処へ行かれるのですか、イマサを置いて御出立なされるのですか」

大声が聞こえるわけではなかった。震えるような幽き声が蜘蛛の糸のように私の足に絡み付き、自由を奪った。声は床からも壁からも天井からも、絹糸のように細く、しかし鋼のように強く響いてきた。

私は吸い寄せられるように階段の奥の小暗い廊下へと足を向けた。一歩進むごとにイマサの切なさや妖しさを織り交ぜた声が私の名を呼んだ。ランケン殿、ランケン殿、私を置いて行かれるのですか、ランケン殿、ランケン殿、我らは固く契りを交わしたではありませんか、ランケン殿、ランケン殿、永久の愛を誓いあったではありませんか、ランケン殿、ランケン殿……

廊下の先は黒い大きな一枚板で作られた扉だった。自らの尾をくわえた大蛇を輪の真ん中で捻った紋章が、扉いっぽいに彫り込まれていた。扉を開けてはいけないことはわかっていたが、声に抗うことはできなかった。私は震える手で輪型の青銅の把手を引いた。

部屋の中は薄暗かった。奥の方に小さな窓があるようだったが、森の木立に覆われているのだろうか、ほとんど光は入っては来ない。壁際の燭台からの明かりが、部屋の様子を見て取るための全てだった。

奇妙な部屋だった。壁には角というものがなく、完全な円形を成している。部屋の中央に置かれた大きな寝台もまた円形だった。寝台には大きな天蓋が天井から吊り下げられており、精緻な刺繍のなされた薄物が周りに下がっていた。

その紗幕の中、円形の寝床の上で何ものかが蠢いていた。背後の燭台からの光で影絵のようになったその姿は、長い髪を垂らした少女のように見える。ただ、何処か不自然な様子で上半身をゆらゆらと艶かしく円を描くように揺らしている。

「ランケン殿、イマサを捨てて行かれるのか、固い契りを交わした

女子を捨てて行かれるのか、永久の契りを交わした私を捨てて行かれるのか……」

今や、声はつきりとその円形の寝所から聞こえてきた。

「ランケン殿……ランケン殿……」

何かが擦れるような滑るような奇妙な物音が、私の名を囁く妖しの声と混じり合い、円形の寝床から発せられ、部屋の中をぐるぐると輪を描いて這い回った。

寝床を覆っている薄物を暴き、その中にいるものを露にしたいという強烈な感情が沸き起こった。情欲の昂りに突き動かされて、女の衣服を剥ぎ取ろうとする野卑な男になった気分だった。

だが、それはそこにいる何ものかの正体をはっきりさせ、不安と恐怖の頂きにある心を安堵させたいという欲求でもあった。

「……ランケン殿、ランケン殿……」

掠れるような艶やかなような声が円形の部屋で無限の円を描き、ゆるゆると回る混沌の渦を私の頭の中に形作った。

私は山賊から奪った彎刀の切っ先を寝台の方へ突き出し、足を進めた。私の名を呼ぶ声は激しさを増し、頭蓋の中に大渦を作る。

さつと剣先で紗幕を払った。そこには怪物がいた。

乱れ波打つ黒髪を頂いたイマサの美しい白皙の顔があった。折れそうな肩と華奢な腕、小さく固そうに見える両の乳房、臓物を納めるには細過ぎるかのような白い腹もあった。

だがその滑らかな腹に臍はなかった。小さな腰骨と可愛らしい尻もなかった。幾度となく私の一物を突き入れた陰裂もなかった。あるのは艶やかな鱗に覆われた巨大な白蛇の半身だった。

蛇と化したイマサの半身は、円形の寝床に蜷局を巻き、白く滑るような光沢を放っていた。折り重なる無数の鱗は、白の中にも幽かな虹色の光沢を忍ばせ、美しい錦の光を放っていた。

恐怖と肉情が私の心中を激しく駆け巡った。鳥肌が立つような恐怖を感じながらも、一物が固くなるのを感じた。東方風の美しい少女の半身と鱗の生えた異形の半身を持つ奇怪な姿となっても、イマ

サは凄艶な美しさを放ち、私を誘い惑わすのだった。

「ランケン殿、ランケン殿、さあ、ここへ来て私を抱いておくれ、優しい口づけと激しい抱擁を私に与えておくれ……ランケン殿、ランケン殿……寒いわ……」

イマサの言葉とともに、部屋の中には冷気が忍び入ってきたかのようだった。私は円形の寝台へと近づいて行こうとする足を、必死の意志で止めた。

「二階の……人骨は……二階の無数の死骸は……あれは何なのだ」

私は非常な努力をして喉から声を絞り出した。声と一緒に喉から血が滲み出るような気がした。

「見たのですね、ランケン殿……」

イマサの黒曜石の瞳は、びたりと私の両目に据えられ、ぎらぎらとした光を放った。珊瑚色の唇の端がまくれ上がり、長い牙を露にして、彼女は凄みのある笑いを浮かべた。白い歯の間から真っ赤な細長い舌先が覗き、ちろちろと素早く動いた。下の先は二股に分かれていた。

「見たのですね、ランケン殿、見たのですね……」

半人半蛇の女は、少女の姿をした上半身を寢床の上から押し出し、私に迫った。長く波打つ黒髪、小ぶりの美しい乳房、大きな黒い双眸、それは夢幻のような悦楽の褥を共にした女に違いなかったが、異形の怪物の歪んだ影がその美しい姿に重なり、どす黒い陰惨な縁取りを描いているようだった。

イマサはゆるゆると体をのぼし、私の周りを回りながら、囁き続けた。

「見たのですね、ランケン殿……私を置いていかれはしませんね、ランケン殿……我らの契りは永久のもですね、ランケン殿……永久に、永久に、イマサを想い続けて下さいませ……我らの契りは永久に、永久に……ランケン殿、ランケン殿……」

淫靡な声とあやかしの姿が私の周りに渦となつて回り続けた。回り灯籠の真ん中に入り込んでしまったかのようにだった。

「……ランケン殿、ランケン殿……見たのですね……永久の契りを……置いていかれるのですか……イマサを永久に、永久に、永久に……」

恐怖に駆られた男の絶叫が聞こえた。私の声だった。声とともに私は彎刀を振り下ろした。

恐ろしい叫び声が出て、甘く毒のある幻は破れた。真っ赤な血飛沫が上がり、イマサは血まみれの顔面を押さえて、半身をのけぞらせた。

「顔が、私の顔が！あああー！」

私は緩んだ蜷局の中から飛び出したが、白蛇の胴に足を取られて、床に倒れた。刃はイマサの美しい顔を額から顎まで斜めに切り裂いていた。朱に染まった震える両手を離すと、ぼっくり開いた傷口からさらに鮮血が流れ出し、骨さえ覗いているように見えた。

「よくも、よくも、私の顔を……」

凄まじい形相で私を睨みつけると、妖女はぐわつと口を開いた。珊瑚色の唇が血を吹きながら見る見るうちに耳まで裂け、長い犬歯は指程の長さまで伸びた。二股に分かれた長い深紅の舌が、桃色の唾内から淫らがましく出たり入ったりしている。

瞬きをしない黒い両眼は瞳孔が縦の切れ目のように変化し、凄まじい力で私を縛り付けようとする。斜めに裂けた鼻はほとんど高まりがなくなり、亀裂のような鼻孔のみとなった。

かさこそという嫌な音がして、下半身を覆っていた白い鱗が肩や腕、首筋にまで広がった。

「ランケン殿……ランケン殿……よくも、よくも、私を……」

奇怪な蛇人の異貌と化したイマサは狂乱する甲高い女の声と暖れた異様な叫び声が折り重なる物凄い声を発して、私に迫ってきた。こちらにのぼした鈎爪のついた両の手は、指が異様に融合し、三本指になつていた。

私は必死で身を起こし、壁際まで後退った。このような異形と化してもなお、怪美な吸引力は無くならない。蛇眼が私の視線を捉

え、赤い二股の舌が怪異な淫楽の褥に私を引きずり込もうとする。二階で見た無数の屍が呼び起こした恐怖が辛うじて私をイマサのもとへ駆け寄ることを阻み、後ろ手に出口を探らせていた。

蛇妖は次第に蝮局を解いて、血みどろの姿で私に近づいてくる。

「ランケン殿、ラン…ケン…殿、ラ…ケン…」

イマサの言葉は徐々に人間らしい響きを失い、何事か判然としないうめられた呻き声のようなものになっていく。手を伸ばせば触れられるところに迫ったその顔は、斜めに断ち切られた傷口が広がり、じくじくと湧き出る血膿の中から、鱗に覆われた新しい肌が覗いている。

「…ラン…ケン…ラ…ケ…わた…しを…おい…おい…」

言葉の形を失わんとしている言葉が、途切れ途切れに彼女の裂けた口から発せられた。見開かれままの両眼から流れ落ちていくのは傷口から流れ込んだ血なのか、或は血の涙なのだろうか。

私の心中にはその血涙に応えたいという恐ろしい誘惑が生じた。応えられなかった男達は、二階で（或は猟師小屋で）骨となつていくのだ。そうに違いない。私なら応えられるかもしれないのだ。私なら応えられる。そして、永遠の悦楽、永久の契り、永久の幸せが、約束されるのだ。

「ラン…ケ…しを…おい…」

人間の言葉はそこで途切れ、後はしゅうしゅうという何かを擦るような奇怪な音が続いた。顔の傷口が一気に広がり、美しかった少女の顔は襪褌布の仮面のように左右に垂れ下がり、ずるっと剥け落ちた。

血まみれの顔皮を肩口にぶら下げたまま、イマサはさらに私に迫った。人というにはあまりに異形な、蛇というには人に近過ぎる、奇怪極まりない姿、いつしか肩の骨も変形し、両腕は胴から生える異常に萎縮したものとなっている。

髪が抜け始めた。黒く波打つ長い髪が、女怪が身を震わせるたび

に、束になって抜け落ちる。髪の抜けたところからは、毛穴からぶつぶつと血玉が吹き出し、たたりたりと奇怪な顔の上に流れ落ちていくのだった。

唇のない口と瞼のない目は間近だった。三本指の手が、死の抱擁に向かつてのばされてくる。

その時、左手が扉の把手を探り当てた。恐怖と僅かな希望と把手の固い確かな手触りが、どうにか誘惑に打ち勝った。私は眼前に迫った女怪に剣を突き入れた。

凄まじい絶叫が響いた。剣先は未だ人間の姿をとどめている乳房の真ん中を貫き、背中まで突き抜けた。絶叫は噴き上げてきた血の泡にかき消されて、ごぼごぼという異様な音となった。

耳まで裂けた顎から血の泡を噴きながらも、抱擁を求めるように鱗の生えた腕がのばされてくる。血みどろの牙が最後の口づけを求めて迫ってくる。私は血で滑るイマサの肩に左手を押し当て、必死で彎刀を引き抜くと、再度斬りつけた。

刃は女怪の細い首を半ば切断し、噴水のように新たな血が噴き出した。長い下半身をくねらせ、蛇人はのたうち回った。尾の先が寝台の天蓋を打ち壊し、燭台の炎が吹き飛んだ紗幕に燃え移った。

円形の寝室を滅茶滅茶に破壊して、瀕死の怪物は痙攣しながらのたうち回った。炎は瞬く間に上掛けや窓掛にも燃え移った。炎の中で鱗のある体を苦悶にくねらせながらも、黒曜石の瞳が私を見据えているような気がした。炎の熱のせいではない、ねっとりとした汗が体中から噴き出した。

私は恐慌に襲われ、意味のない喚き声をあげながら、円形の部屋を飛び出した。廊下は曲がりくねり何処までも続く筈のようだった。背後からは恐ろしい屈もつた呻き声と何か重い物を引きずるような音が聞こえてきた。

頭の中には、私の名を呼びながら悲痛に啜り泣くイマサの声が甞していた。

私は恐怖に追い立てられて、ひたすら走った。振り返ったらお仕

舞だとわかっていたが、それでも振り返りたい、あの声に応えたいという恐ろしい衝動が繰り返し繰り返し起こった。

何処をどう走ったのか、何枚目かの扉を開けると、そこは玄関の広間だった。細長い部屋がさらに異様に長く見え、玄関の扉がひどく遠くに見えた。左右の壁に描かれた這いうねる絵模様、絡み合う無数の大蛇が動いていた。壁板が膨らみ、幾つもの鎌首が迫り出し、険のない目で私を凝視していた。

私は闇雲に剣を振り回し、玄関に向かって突進した。迫る大蛇の頭を幾つも幾つもの斬り払った。床に落ちた首は腐った果実のように潰れて、赤黒い塊の中から無数の新しい蛇が生まれた。見る見るうちに広間の床は無数の蛇に覆われ、女怪の忠実な僕たちは私の足に絡み付き、噛み付き、引きずり倒そうとする。

背中ではばりばりという大きな音がした。扉が引き裂かれ、何かが広間に侵入してきたのだ。恐ろしい呻き声と狂乱した女の泣き声が広間と頭蓋の中に錯綜し、響き渡った。

床はもはや蛇の底無し沼と化していた。一步進むごとに何十匹もの蛇に絡み付かれる。私は膝から下に無数の蛇を引きずりながら、玄関の扉に体当たりした。

扉は開かなかった。門が掛かっている。震える指で重い門を引き上げた。その間に蛇は胸の辺りまで這い上がってくる。

ようやく扉が開き、私は階段を転げ落ちた。剣を杖にして必死で立ち上がり、館の前の草地を走った。纏わりつく蛇は館から離れると乾いた泥の紐のようになり、ぼろぼろと体から剥がれ落ちた。

森に入ったところで振り返り向き見ると、イマサの館は彼方此方の窓から朱色の炎を噴き出し、炎上していた。炎のあがる音とは別に、低く這い回るような声と、甲高い女の声が切れ切れに聞こえてきた。

玄関の張り出した小屋根がぐらぐらと揺れたかと思うと、扉ははじけ飛び、館の中から炎に包まれた何かが飛び出してきた。長い体は炎と血に覆われ、其処此処には焼け焦げた黒い鱗が無惨な有様を

見せている。

黒髪はすべて抜け落ち、その顔はもはやほとんど蛇と化していたが、それでも黒く焼け焦げ、血を垂れ流すその凄まじい顔は、何処かにイマサの面影を残しており、その幾度となく歓楽を共にした女の影が、更なる恐怖を私の心中に沸き起こすのだった。

燃える妖蛇は、私の姿を認めるや、苦悶と怒りに身を振らせ震わせながら、恐ろしい執念で這い寄ってくる。長い身をくねらせる度に、炎に焼かれた鱗と肉が剥げ落ち、新しい血を迸らせるが、それでもなお動きを止めずにこちらに向かってくる。

奇怪な変身と刀傷によって、もはやその喉は人語を発することは叶わぬと思われたが、私の名を呼ぶ声は何処から立ち起こり、か細い悲痛な声から割れ鐘のような歪んだ響きとなって、私の頭骨の中を駆け巡るのだった。

私は踵を返すと、森の中へ駆け出した。何処へ向かって何処を走っているのかなど、まったくわからなかった。ただ、眼前の恐怖から逃れるために、ひたすら走った。

背後からは、梢が圧し折られる音、重いものが引きずられる異様な擦る音、炎の上げる音が、恐怖の刃となって背中に突き刺さった。

私は決して振り返らなかつた。もう一度振り返れば、地獄の渦潮の中へ、幻影の桃源郷の中へ、引きずり込まれて二度と出ることはできないとわかつていた。何故ならイマサの黒曜石の瞳は、未だ生きていたから。焼け焦げ、血みどろの無惨絵のような姿になっても、イマサの黒い双眸は未だ輝きを失ってはいなかつたのだ。

私は狂ったように走り続け、逃げ続けた。背中からの恐怖の音は止まず、イマサの声は頭蓋の中に響き続けたが、次第次第に弱まってきた。恐怖が私のすべてを支配していた。私は走り続けた。森は走っても走っても、何処までも続いていた。私は走り続けた。森は走つても走つても、何処までも続いていた。

喉はからからに干上がり、胸は壊れそうな韃のようだった。背後

からの音と声は、決して消え去りはしなかったが、幽かな夕影のうなものととなり、何時しか細い絹糸のうなものとなった。

木の根に躓き、私は倒れた。冷たく湿った朽葉が頬にあたり、イマサの滑らかな肌を想起させた。氷室のような冷たい恐怖を感じたが、もはや身を起すことはできなかった。

遠く、とても遠いところから、イマサの私の名を呼ぶ声が聞こえてきた。とても、とても遠いところだ。ランケン殿、ランケン殿、私を置いていかれるのですか、ランケン殿、永久の契りを交わしたではありませぬか、ランケン殿、永久に添い遂げると誓ったではありませぬか……ランケン殿、ランケン殿、ランケン殿……声は段々と遠ざかっていくような気がした。消えて無くなってほしいと思つたが、その声が決して消えない声だということ、わかつていた。

5

目が覚めると、目の前には髭面の男の顔があった。男は私の目覚めを喜んでくれたようで、何事か言いながら笑った。音は聞こえてきたが、何を言っているのかはわからなかった。数人の厳つい顔の男や赤い頬の女が私の顔を覗き込み、何事かを喋り、心配そうな顔をしたり、笑ったりした。

次第に彼らの発する音は言葉となり、私は自分が今、何処にいるのかを知った。

私はフンケルの村の唯一の宿屋の軋む寝台に横たわっていた。森の外れで倒れているところを狩りに出た猟師に発見されたという。

「それにしても、旅の御方よ、あんなところで何をしていたかね」  
宿の主人らしき髭面の大男が尋ねた。あんなところと言う口調には何か忌まわしいものへの嫌悪感が潜んでいるように感じられた。

「道に迷ってしまった。ウサリカ商人から買った地図が出鱈目だったらしい。酷い目にあつたよ」

それ以上のことは喋らない方が良いような気がした。

「そうかい。ウサリカ商人の地図なんて当てにしちゃあなんねえぞ。奴らは子どもの落書きでも、宝の地図だと言つて売りつけようとする」

「よく覚えておくよ」

薄汚れた前掛けをした女が木の椀に入つた汁物と暖めた葡萄酒を持ってきた。芋と何かの肉が入っていた。

「客人は御食事だ。みんな仕事に戻れ」

主人は人々を追い出し、自分も出て行つた。私は注意深く肉を除けて食事をとつた。赤い葡萄酒は飲む気にならなかった。

暫くすると髭面の主人が、身を屈めるようにして部屋に戻つてきた。

「館に行つたのか」

主人は椅子に腰を下ろし、不安気に髭をなで回しながら訊いた。

「ああ」

主人は驚いた様子で短く息を吸い込んだ。

「御前さんはあの館から生きて戻つてきた初めての人間だ……どうやって、戻つてきた？あの、あの御方は……」

「斬つた」

主人はさらに驚き、椅子を軋ませて体を反らした。まるで私が恐ろしい邪鬼にでも見えるかのようにだった。

「そうか、斬つたのか……では、あの、あの御方は……死んだのだな」

炎に包まれ血を滴らせながらも、追いつがってくる妖蛇の姿がさつと眼前に蘇り、私は身震いした。

「……たぶん……」

自分に何かを納得させようとするかのように、主人は無言で頷いた。

「あれは……何なのだ」

主人は私が飲まずにおいた葡萄酒を一気に呷り、長い溜め息をつ

いた。

「森の奥には、ずっと昔から館があった。大昔に東の地からやってきた一族の神を祭る社だったらしい。蛇の神だ。代々巫女が館を守ってきた。婿は代々この村の若者から選ばれた。蛇の神は多産と豊穡の神で、邪なものではなかった。村の祭りには巫女も加わり、共に歌い踊った。」

「だが、ある時、宿を求めた旅の僧侶に巫女は恋をした。暫くは蜜月の日々を送ったが、僧は巫女の恋心の激しさに恐くなり逃げ出した。巫女は僧を捜し回ったが見つからない。狂乱した巫女は蛇の神に救いを求めた。神と巫女がどんな盟約を交わしたのかはわからない。巫女は不思議な力を得て白蛇に姿を変え、この村に匿われていた恋人を捜しだした。白蛇は恐ろしい力で恋人を抱きしめ、僧は体中の骨が砕けて死んだ。白蛇は愛した男の骸と共に森に帰った。」

「それから、村の若者がしばしば森のあたりで姿を消すようになった。館の近くを通る道を行く旅人が行方知れずにもなった。獵師が森の奥から帰らぬことも重なった。」

「俺が子どもの頃には、旅の祈禱師が森の中の獵師小屋に陣取って、調伏しようとしたこともあったが、やはり帰ってこなかった。以来、森の奥には誰も行かなくなった。それでも、時折旅の者が姿を消したという話は聞く。森の入り口あたりで白い女の影を見たという話も聞く。行方知れずになる若者もいる」

語り終えた主人は、葡萄酒をもう一口飲むうとして、既に酒杯が空なのに気づき、陶器の酒瓶と杯をもう一つ持ってきた。

「飲むか」

「いや、止めておく」

「そうか」

主人は酒瓶を傾け、杯を満たした。

私はこの数日間のことを語った。主人は酒杯を三杯干した。

私が話し終えると、髭面の男は太い指で空になった杯を回したり、擦ったりしながら、訊きにくそうに尋ねた。

「そうか、森の奥の煙は館が燃えていたのか……それで、御前さん、本当にあの……あの御方は死んだんだね？」

「……おそらくは……」

私にはそれ以上答えることはできなかった。

すぐにでも旅立ちたかったが、私の体はひどく弱っていた。二晩、宿に逗留した。

二日目の明け方、空が白み始める頃に目が覚めた。風が強いのか、木立のざわめく音やひゅうひゅうという音が聞こえてくる。私は寢床の中から、板張りの天井を眺めた。見ているうちに天井板の木目がゆるゆると動き出した。水に浮いた油が作り出す絵模様のように、木目はゆつくりと流れ、渦巻き、奇怪に蠢いた。

やがてそれは蛇の姿となった。無数の蛇が天井に張り付き、鱗の肌を滑らせ、蠢き回っていた。幾匹かの蛇は白蛇となり、寄り集まって、白い女の顔となった。

「……ランケン殿、ランケン殿、私を置いていかれるのですか……ランケン殿、ランケン殿、ランケン殿……」

珊瑚色の美しい唇が開き、囁いた。白い糸切り歯が覗いた。黒い動かぬ瞳が恐ろしい視線で私を貫いた。

私は寝台から飛び起き、わずかな旅支度を引つ掴むと部屋を飛び出した。

主人は井戸から水を汲んできたところだった。

「どうなさった？」

「生きている！」

「えっ！」

「まだ生きている！」

主人は驚き水桶をひっくり返した。水の流れの中に白く光る長いものの姿が見えたような気がした。

私はそのまま宿を飛び出し、フンケルの村を走り抜けた。運良く隣の村まで行くという荷馬車に行き会い、飛び乗った。

イマサの声はそれから幾晩か私を悩ませたが、館から遠ざかるに

つれて、日が経つにつれて、薄れ聞こえなくなった。奇怪な蛇の幻も現れなくなった。

私はそれからも凝りもせず、旅の途中で幾人もの女を抱いたが、暫くの間は朝、寢床に何かおかしな物が落ちていないか、確かめる癖が残った。

幸いなことに、鱗を落とす女とはその後褥を共にすることはなかった。